

オルシクルマラプト

オルシクルマラ
プト (o-そこに
rus-毛皮 kur-
を包含する mar
apto-頭蓋:語源
は客人) とは、
毛皮付きの罌の
頭蓋を指す語で



佐賀 彩美 (さが あやみ)

アイヌ語地名研究会

北海道出身。北海道大学法学部卒業。モンレー国際大学院(現ミドルベリー国際大学院モンレー校)通訳翻訳学科修士課程修了。北海道大学大学院農学院農学専攻博士後期課程修了。全国通訳案内士。

けて外へと引き出
されます。また、
この時、穴の中は
手のひらに乗る
ほど小さな子熊が
いる場合もあるそ
うです。引き出し
た罌は早速にその

す。このコラムでは過去2度ほどアイヌの代表的な霊送りの儀礼であるイヨマンテについて書かせていただいたことがあります。イヨマンテは原則として、子熊から育てた罌を送る儀礼ですが、山で授かった罌も送りの儀式がされていました。藤村先生の最後の講義では、この送りについて説明されていたのでご紹介します。

生活のすべてを自然の恵みに依存していたアイヌの人々は、自然を注意深く観察していました。例えば、1月下旬から2月初めの雨は罌の子どもを洗う、それから約1か月後に降る雨はシャチの子どもを洗う、と表現していました。春熊猟は3月に雪が堅雪へと変わり、簡単に雪面を歩けるようになると始まります。罌は大抵、陽の当たる南斜面に越冬用の穴を掘り、穴の一番奥で周囲より一段高くなっている場所に笹を敷き詰め、そこを寝床とします。アイヌの人々は、前年のうちに、罌が越冬用巣穴を掘った斜面の穴の位置を確認・記憶していました。罌は、秋に鮭やドングリをたっぷり食べて越冬に十分な栄養を蓄えます。肩の脂肪層は10センチほどの厚さにもなるそうです。そして、春先になるとどういふ訳か、罌の穴の入り口付近に土くずのために雪色に変色し、穴の場所が一層見分けやすくなります。神々の物語には罌のお手伝いさん役の狸が、穴の中を掃除して汚れた土を出すのだという話があります。

罌の穴に到着すると、猟師は、巣穴を塞ぐように数本の棒を立ててから、棒の先端に荷縄を結び、もう一方を立木に結ぶことで、完全に封閉します。罌は、体の構造上、前足は手前側にしか動かさえないため、棒を外側に押し出すことができません。そこで、罌は待ち構えていた人によって仕留められ、その骸は荷縄をか

場で荷ほどき(解体)され、頭蓋つきの毛皮を背負う人を先頭に、各部位の骨や肉、そして莫塵で包んだ内臓等が順番に山から里へと降ろされますが、獲物を得たことは、猟師の指示を受けた猟犬によってすでに村に知らされています。一行の到着は、猟師たちが村近くで木を叩いたり、空砲を撃ったりして知らせました。村の入口近くでは、女性や子どもたちまで、総出で「オノノ、オノノ」と、手を叩いて歌いながら迎えることとなります。

そうして、一行は村長の家まで行くと、罌神(罌の頭蓋)を、屋外に設けられた祭壇の神様に挨拶させてから、神窓より家の中に運び入れます。この間も、先ほどの歌はずっと歌い続けられます。また、送りの儀式にはたくさんのご馳走が欠かせないため、各家が手分けして準備しました。中でも一番大切なのは米粉やイナキビやアワなどで作る団子ですが、それらはすべて精白しなければならないため、2~4人ほどの女性が一組になって臼でついて糠を取り除きます。この作業は、「ヘッサオーヘッサ」という3拍子の歌などを歌いながら、休まずに行われました。こうした送りの儀式は1日だけでなく2日、3日と続きます。

道内では今年も罌の出没が相次ぎ、駆除が強化されています。昨年、白糠では5月に捕獲した罌を冷凍庫で保管し、9月になって関係者が費用を出し合って送りの儀式をしたそうです。いつも申し上げるのですが、人手も費用もかかるイヨマンテや駆除された罌の送りを、できれば公的補助により復活させることはできないものかと思います。これは、アイヌ文化伝承の根幹に関わる重要なことなのです。



*本稿は、元北日本文化研究所代表であった藤村久和先生を講師として(一社)北海道開発技術センターが自主事業として実施してきたアイヌ文化勉強会の内容を筆者が取りまとめたものを、藤村先生に長年師事されていた花輪陽平氏に校閲いただいたものです。

藤村 久和 氏 (1940-2025) 元北海学園大学名誉教授 北日本文化研究所代表 アイヌ語地名研究会会長
アイヌ学全般(精神文化・口承文芸・衣食住・民族医療(整体ほか)等)を研究領域とすると共に、アイヌの人々が自然を管理することなく、いかに共存してきたかについて、その思想や哲学を自ら学び・実践してきた。主な著書:『アイヌの霊の世界』(小学館、1982年)、『アイヌ、神々と生きる人々』(福武書店、1985年)、『アイヌ学の夜明け』(梅原猛氏との共編、小学館、1990年)、『アイヌのごはん』(監修、デーリマン社、2019年)、『平成20~令和6年度アイヌ民俗文化財調査報告書アイヌ民俗技術調査1~16』(北海道教育委員会、2008~2025年)等。